

2022 年 5 月

食料安全保障月報

(第 11 号)



令和 4 年 5 月 3 1 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 5 月食料安全保障月報（第 11 号）

目 次

概要編

I	2022 年 5 月の主な動き	1
II	2022 年 5 月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 中国のウクライナ産とうもろこし輸入の代替は？ （資料）	4
1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	17
7	FAO 食料価格指数の推移	19

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 冬小麦は減産も春小麦の回復から生産量は前年度に比べ 5.0%増加	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 45.9%増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4%下回る	
	＜EU27+英国＞ 主要生産国のフランスの生産量は前年度に比べ減少	
	＜中国＞ 小麦生産量は前年度に比べ 0.1%減少の 136.9 百万トン	
	＜ロシア＞ 小麦輸出量は世界第 1 位	
	＜ウクライナ＞ロシアの侵攻により小麦の輸出量は前年度に比べ 47.4%減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 2 年連続生産量・輸出量ともに減少	
	＜インド＞ 輸出量は世界全体の約 41%を占める	
	＜中国＞ 生産量・消費量・輸入量がともに史上最高	
	＜タイ＞ インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国に	
	＜ベトナム＞2021/22 年度の冬春作の収穫が終了し、夏秋作の作付け開始	

Ⅱ 油糧種子	
大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
＜ブラジル＞2021/22 年度の収穫終盤、高温・乾燥で減産見通し	
＜アルゼンチン＞2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続	
＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し	
＜カナダ＞ 収穫面積の増加により増産、輸出量も増加見通し	

特別分析トピック

ブラジル、豪州、カナダ、スイスの農業政策の概要

【利用上の注意】

表紙写真：米国のミネソタ州のとうもろこしの作付け（4月 27 日撮影）
例年と比べて低温の中、作付けが行われている。

(概要編)

I 2022 年 5 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は成熟期で、その他の作物は作付けから初期生育期、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、5 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、ウクライナの小麦生産量・輸出量が前年度より大きく減少し、国際相場は過去最高を更新した後も、高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通しで、同様にウクライナの生産量・輸出量が大きく減少している。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：4 月）については、肉類（119→122）が過去最高になったものの、穀物（170.1→169.5）、植物油（252→238）が下落した影響により、3 月より下落（160→159）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落傾向で推移していたが、本年 2 月以降は再び上昇傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、5 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ウクライナの春作物の作付・生産見通し

ウクライナの小麦の大半を占める冬小麦は 5 月現在、成熟期を迎えている。また、ウクライナ農業政策食料省によると、春作物の作付けは 5 月 12 日時点で作付予定面積の 90% 近く進展しており、春小麦は 18.8 万ヘクタール作付け（作付予定面積 19.0 万ヘクタール）、とうもろこしは 323.9 万ヘクタール作付け（作付予定面積 485.4 万ヘクタール）となっている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23 年度のウクライナの小麦生産量はロシアの侵攻の影響を受け、対前年度比 34.9% 減の 2,150 万トン、輸出量は、減産に加え、インフラの被害から大きく減少し、対前年度比で 47% 減の 1,000 万トンの見通し。また、とうもろこし生産量については、小麦以上に減産となり、対前年度比では 54% 減の 1,950 万トン、輸出量は、対前年度比で 61% 減の 900 万トンの見通し。

2 米国の春の作付け遅れと生産見通し

米国農務省（USDA）によれば、5 月 16 日時点の 2022/23 年度のとうもろこし、大豆、春小麦の作付けの進捗率はそれぞれ 49%、30%、39% と前年度及び過去 5 年平均より遅れている。主に、コーンベルトでの低温や雨がちな天候が要因となっている。一方、冬小麦については主産地の乾燥の影響等により同日時点の出穂率が 48% と前年同期（51%）、過去 5 年平均（53%）より遅れており、作柄も「良からやや良」の比率が 27% と前年同期（48%）を下回っている。

春作物については現時点の作付～初期生育段階で 2022/23 年度の実産量を見通すことは難しい。USDA によれば、前年度の春小麦の記録的な減産からの回復により小麦計で 4,710 万トンと前年度より 5.0% 増加する見通し。とうもろこしは肥料価格高騰に伴う作付面積減に加え、作付け遅れによる単収の伸び悩みから、3 億 6,730 万トンと前年度より 4.3% 減少する見通し。一方、大豆は作付面積増から前年度より 4.6% 増の 1 億 2,630 万トンと史上最高となる見通し。

なお、バイデン大統領は 5 月 11 日に農家支援・増産政策として、二毛作の推進につながる作物保険の見直しや、肥料産業への補助金の倍増（2 億 5,000 万ドル→5 億ドル）等を公表した。

3 インドの小麦が収穫期の高温乾燥の影響を受け輸出規制

インドは、2022/23 年度産小麦が収穫期の 3～4 月にかけて高温乾燥の被害を受け、さらにロシアのウクライナ侵攻に伴う代替需要による輸出増加を要因とした国内の価格高騰懸念から、5 月 14 日からの小麦の輸出停止を公表した。ただし、輸入国側の食料安全保障確保のため要請があった場合などは例外的に輸出が認められると報道されている。

従来、ウクライナ産穀物を輸入していたエジプトなど中東やアフリカの穀物輸入国が代替先としてインド産の輸入を検討しており、エジプト政府は輸出禁止の例外扱いとするようインド政府と協議を行った結果、一部の輸入が認められたとみられる。

Ⅱ 2022 年 5 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4 月末、380ドル/トン前半で推移。5 月に入り、インドの輸出制限の懸念やウクライナ産の輸出の停滞から、400ドル/トン前後に値を上げたものの、米国産冬小麦の主産地であるプレーンズでの降雨から一時390ドル/トン台に値を下げた。その後、インドの輸出停止を受け460ドル/トン台後半に値を上げたものの、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画、ロシアの豊作見通し等から値を下げ、5 月下旬現在、420ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、4 月末、320ドル/トン前半で推移。5 月に入り、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まりの一方、米国中西部の低温や雨がちな天候で遅れていた作付けが天候改善により早いペースで進捗するとの期待から価格は緩やかに下落し、5 月下旬現在、300ドル/トン台後半で推移。

コメは、4 月末に450ドル/トン前後で推移。5 月に入り、バーツ安にもかかわらず、イラク等からの強い需要により価格は480ドル/トン前半まで上昇。その後、インド産等との価格競争により下落し、5 月下旬現在、470ドル/トン台後半で推移。

大豆は、4 月末、620ドル/トン台後半で推移。5 月に入り、コロナ感染封じ込めに伴うロックダウンによる中国の需要低迷の懸念等から 5 月上旬に590ドル/トン台半ばまで価格が下落したものの、米国の輸出が中国向けを中心に好調なペースを維持していること、ロシアのウクライナ侵攻の継続やインドネシアのパーム油の輸出規制等による植物油価格全体の高止まり等から再び価格が上昇し、5 月下旬現在、620ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度比 1.0%減の 27.7 億トン。消費量は、前年度比 0.2%減の 27.9 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度比で、小麦、とうもろこしで減少、コメで増加となり、穀物全体で減少となり、27.7 億トンの見込み。

消費量は、前年度比で、小麦、とうもろこしで減少し、コメで増加となり、穀物全体で減少となり、27.9 億トンの見込み。

貿易量は、前年度比で、小麦、コメで増加し、とうもろこしで減少し、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前年度より減少、期末在庫率は前年度より低下する見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.0%となる見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

Ⅵ 今月の注目情報：中国のウクライナ産とうもろこし輸入の代替は？

中国は、2021年、800万トン以上のウクライナ産とうもろこしを輸入していたが、2022年2月のロシアのウクライナへの侵攻で輸入が困難となった。一方、需要面でもコロナによるロックダウンによる経済の減速が懸念されているが、1～3月の穀物輸入は増加している。中国の穀物の輸入動向と世界の穀物の貿易の関連についてまとめた。

1 ウクライナの生産・輸出動向

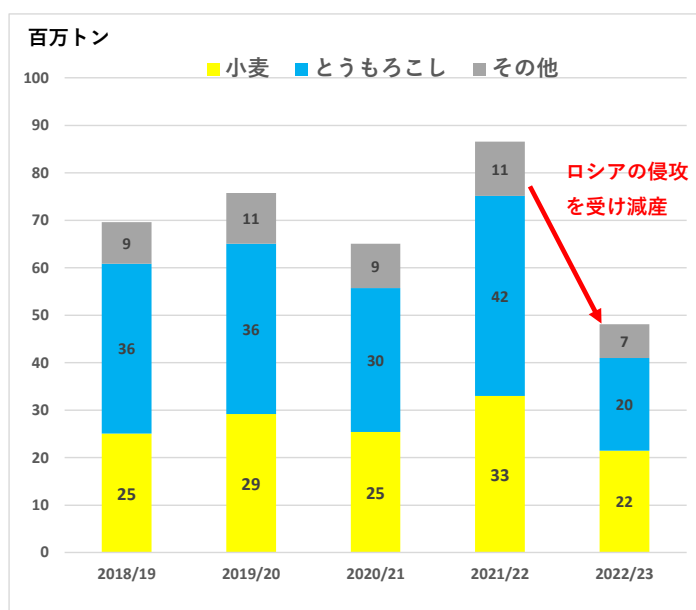
(1) 小麦

米国農務省（USDA）の2022年5月の需給見通しによれば、ウクライナの前年度2022/23年度の小麦については、史上最高であった前年度比35%減の2,150万トンとの生産見通しとなっている。ウクライナは冬小麦が中心で、前年秋までは天候に恵まれ順調に生育していたとみられるが、本年2月以降のロシアの侵攻により、前年度と比較して、収穫面積は21%減の585万ヘクタール、単収は18%減の3.68トンへ低下するとみられている。輸出についても減産に加え、インフラが被害を受けたことや、黒海のオデッサ港等からの輸出がロシアにより封鎖されているため、対前年度比47%減の1,000万トンとなると見込まれている、前年度までの主要輸出先はエジプトなど、北アフリカ、中東諸国である。

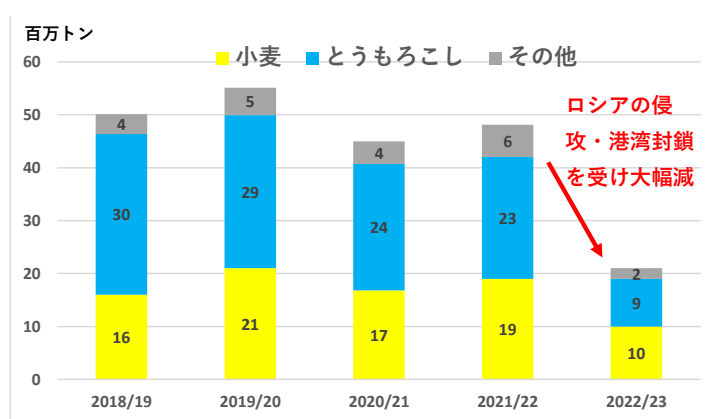
なお、ウクライナは、鉄道輸送により、ルーマニアの黒海沿いのコンスタンツァ港からの輸出に加え、ポーランドなどからバルト海の港からの輸出など、EU諸国を経由した輸出も検討しているとみられる。しかし、ウクライナとEUの鉄道の軌道幅の相違等の課題から以前の輸出量の代替は難しい。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

(2) とうもろこし

USDAによれば、4月以降、作付けが開始された2022/23年度のとうもろこしについても、ロシアの侵攻を受け、小麦同様、前年度比で半減以上の1,950万トンとなると見込まれている。輸出量についても前年度比で61%減の900万トンと見込まれている。

とうもろこしの減産幅（▼2,260万トン）が（小麦▼1,151万トン）と比べて大きい。2022/23年度の穀物全体の収穫面積は20%減の見通しであるが、特にとうもろこしは36%減

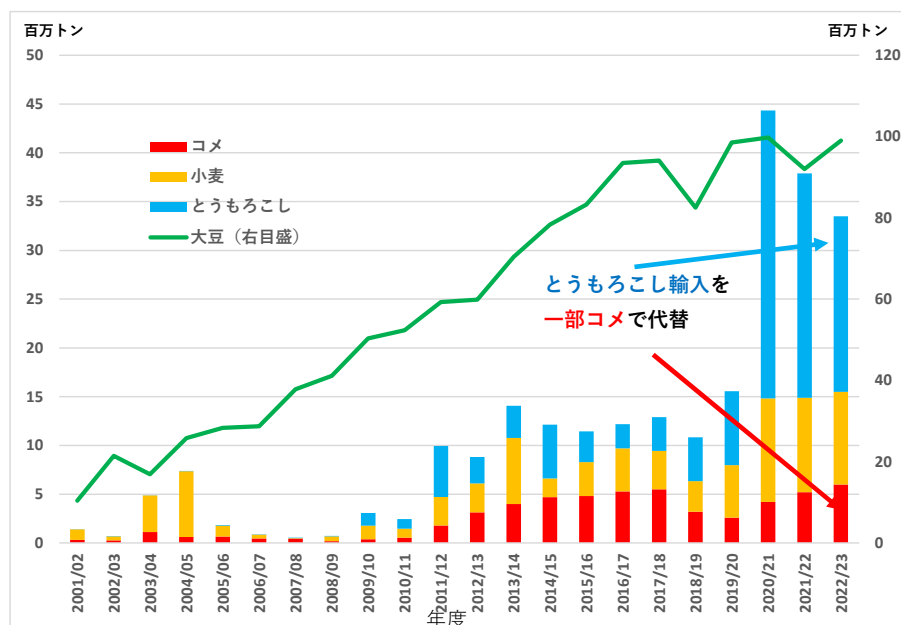
と減少幅が大きい。その背景として、とうもろこしは肥料の投入コストが他の作物と比べて高く肥料価格が高騰していることや、ロシアによる黒海封鎖のため輸出の見通しが立たないこと等から、他の穀物や油糧種子に作付けを切り替えたとみられる。なお、前年度まで主要輸出先は中国と EU となっている。特に中国向け輸出は 2021 年には 800 万トンを超えていた。

2 中国の需要と輸入動向

(1) 2021 年の輸入動向

中国の穀物輸入に関しては、中国の貿易統計データによれば、2021 年はアフリカ豚熱からの回復により、飼料向け需要が増加したことから、とうもろこしは対前年度比 2.5 倍の 2,836 万トンに増加した。そのうち、米国産が 1,983 万トンと 7 割を占め、残りはほとんどウクライナ産 (824 万トン) であった。また、とうもろこしの価格高騰により小麦に需要がシフトしたことから、小麦の輸入量も対前年比 19% 増の 972 万トンとなった。小麦については、豪州、米国、カナダ産がそれぞれ 3 割弱を占めている。大豆については、搾油マージンの悪化などから前年比 4% 減の 9,653 万トンと減少した。一方、コメの輸入についてはとうもろこし価格の高騰による飼料用向け需要増もあり、安価なインド産米を中心に増加し、1.7 倍の 490 万トンとなった。

図2 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 5)

(2) 2022 年の需要・輸入動向

現時点の中国の穀物需要については、USDA によれば、3 月に国際価格が史上最高値を更新した小麦の需要については、前年度と比べて 400 万トン減の 1 億 4,400 万トンとなるも、とうもろこしについては逆に 400 万トン増加し、2 億 9500 万トンの見通しとなっている。コメについても、120 万トン増の 1 億 5660 万トンの見通しとなっている。大豆についても搾油需要の回復から対前年度比 6.3% 増の 1 億 1,560 万トンが見込まれている。

一方、2022/23 年産の中国のコメ、小麦、とうもろこしの生産量については、今後の天候にもよるが、USDA によれば、コメは前年度並みの 1 億 4900 万トンを維持も、小麦は前年度比 1.4% 減の 1 億 3,500 万トン、とうもろこしは 0.6% 減の 2 億 7,100 万トンの見込みである。

3 月以降、穀物産地の吉林省や、上海、北京など都市部で新型コロナウイルスの感染拡大によるロックダウンが報道され、経済成長への影響が懸念されている。なお、中国海関統計による 2022 年 1～3 月の穀物等の輸入動向は、大豆については、前年度比 4% 減の 2,029 万トンと減少している。一方、小麦は対前年同期比 0.4% 増の 304 万トン、とうもろこしは 6% 増の

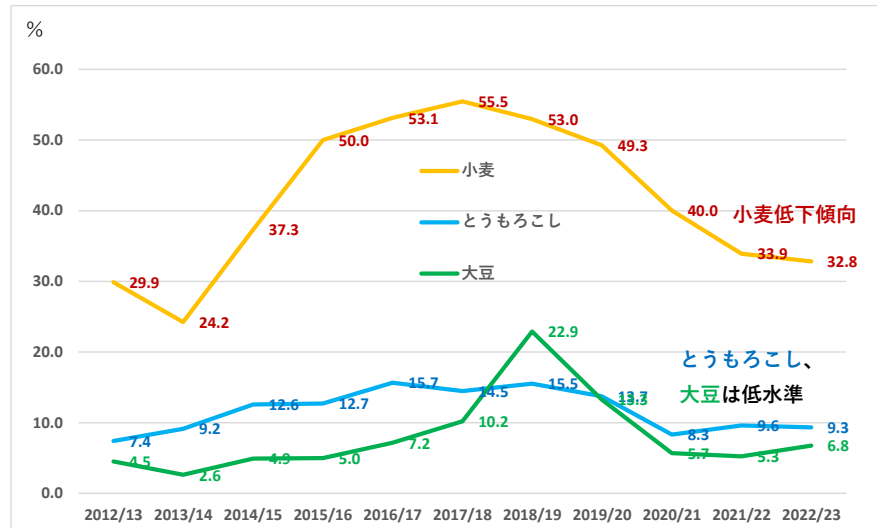
710 万トン、コメは 17% 増の 165 万トンといずれも増加している。

このような情勢の中、李総理は、4 月 20 日に、食料確保の強化を強調し、2022 年産穀物等の収穫の確保を進めることにしている。

3 ロシアのウクライナ侵攻による中国の穀物輸入への影響

中国の穀物輸入の中で、とうもろこしについては、ウクライナ産を年間 800 万トン以上輸入しており、ロシアのウクライナ侵攻の影響を直接受けたとみられる。中国海関統計のデータによれば、1～3 月までの間は、ウクライナからの輸入は前年を上回る輸入量が記録されているなど、その影響は数字には表れていないとはされているものの、

図3 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



今後、ウクライナ産とうもろこしにつ 出典：米国農務省 「PS&D」(2022.5)

いては、他国産で代替するか、他品目

で代替するか、国内備蓄を切り崩す等の対応がとられることとなる可能性があるとみられる。

USDA によれば、中国の 2022/23 年度末のとうもろこし在庫は前年度末より減少すると見込まれている。そこで、従来から米国産とうもろこしを輸入してきたことから、ウクライナ産の代替として米国産の輸入量を増加させる可能性が想定される。しかしながら、米国産とうもろこしは、肥料価格の高騰により、施肥コストの少ない大豆などへ作付けがシフトしたとみられており、USDA の 5 月見通しでも、生産量は 4% 減の 3 億 6,730 万トン、期末在庫率は前年度(9.6%)より低下し 9.3%と見込まれている。ウクライナ産の代替として中国向け輸出が増加した場合は、さらに在庫率の低下の可能性も想定される。

4 ブラジル産とうもろこしやインド産碎米への代替

今までブラジル産大豆を大量に輸入してきた中国は、ブラジル産とうもろこしに関しては植物検疫の関係もあり、ほとんど輸入は行っていなかった。しかし、検疫問題については、輸入の確保のため、本年 2 月にはロシア産小麦の輸入について地域限定を解除し、5 月にはカナダ産菜種についても従来禁止していた 2 つの輸出業者からの輸入を解除してきた。5 月 23 日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし合意に至ったと公表した。ウクライナ産とうもろこしの調達が難しくなったことが背景にあるとみられる。

確かに、ブラジル産とうもろこしに関しては、冬とうもろこしが干ばつ、霜害の影響を受け減産(8,710 万トン)となった 2020/21 年度産に対し、2021/22 年度は、作付面積の増加により生産量は 1 億 1,000 万トンを超えるとみられている。しかし、4 月以降の主産地のマツグロソ州の乾燥の影響等から、CONAN(ブラジル食料供給公社)は 5 月レポートで一度公表した 1 億

1,620 万トン を 1 億 1,460 万トン に引き下げ修正した。今後、5 月以降のパラナ州などの降霜の懸念から、生産量がさらに下方修正される恐れもあるとみられる。

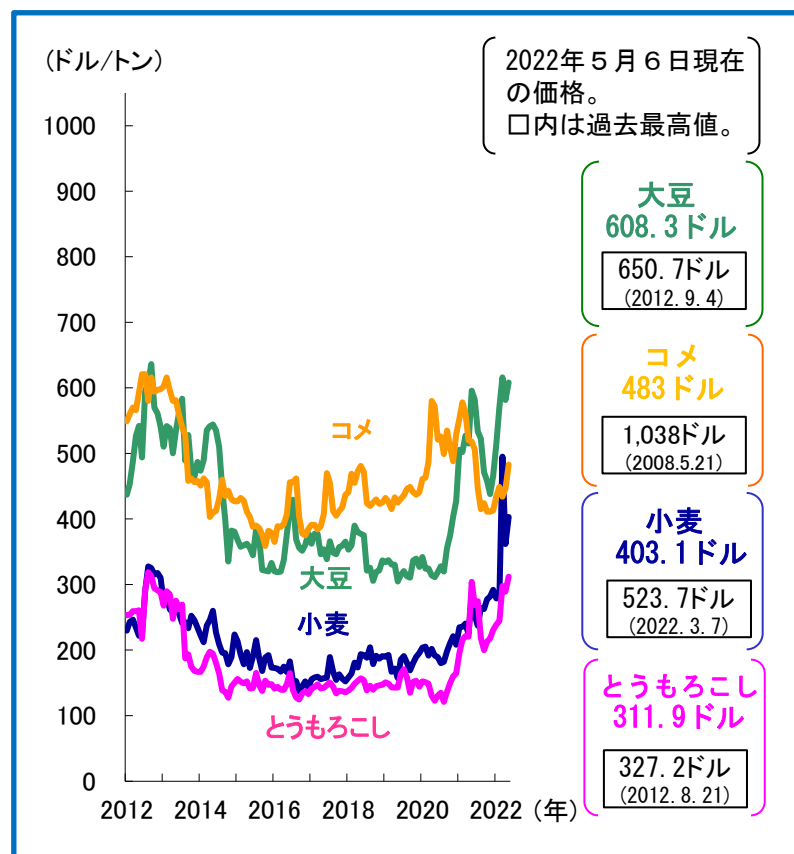
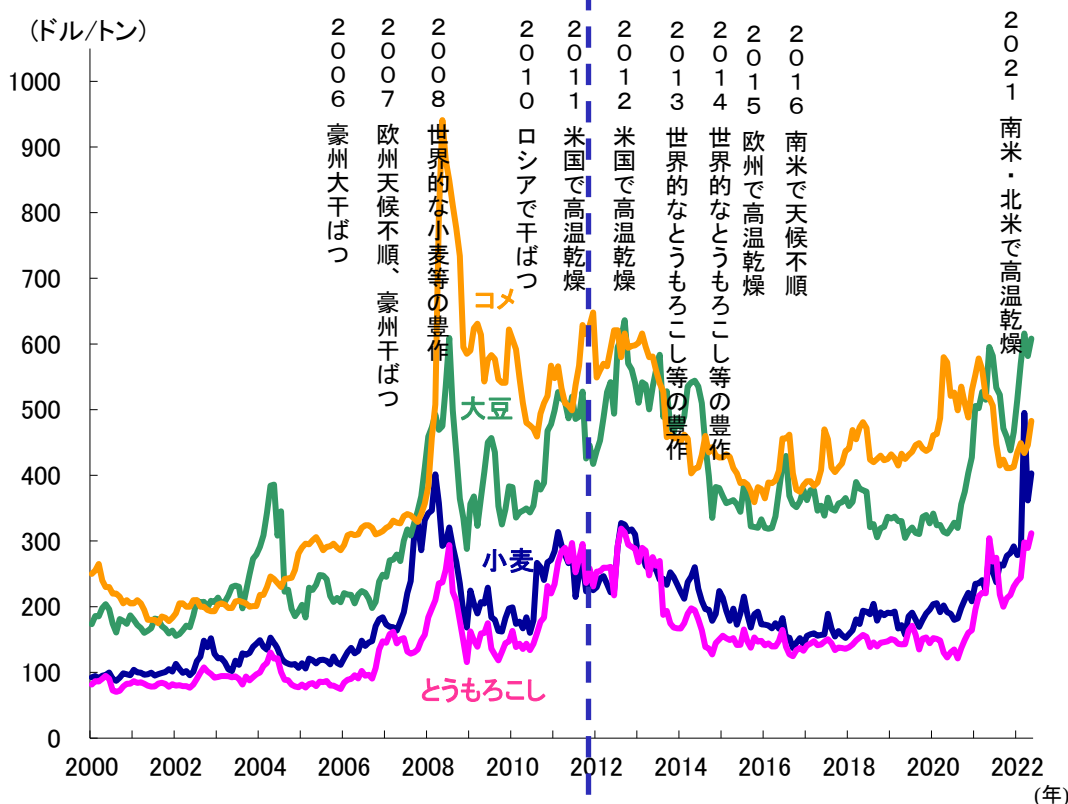
また、現在のとうもろこしや小麦の国際相場が過去最高値に近い高水準で推移しているため、中国は、飼料の配合設計を従来のとうもろこしや小麦から、一部安価なインド産碎米等に切り替えているとみられ、今後、コメの輸入をさらに増加させる可能性もあると想定される。

ただし、インドが 3 月から 4 月にかけての熱波の影響で小麦が減産見通しとなり、エジプトをはじめとする中東諸国からウクライナ産の代替としての輸入需要が強いことから、インド政府は 5 月 14 日以降の小麦の輸出制限を発表した。輸入国側から食料安全保障上インド産小麦の輸入について要請を受け、インド政府が認めた場合等は例外とされている。なお、2007 年から 2008 年の穀物価格高騰時には、インドは国内の食料安全保障確保のため、小麦と同時にコメの輸出も規制を行ったこともある。中国の今後の穀物等の輸入動向やインドの輸出動向については注視が必要である。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇し、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



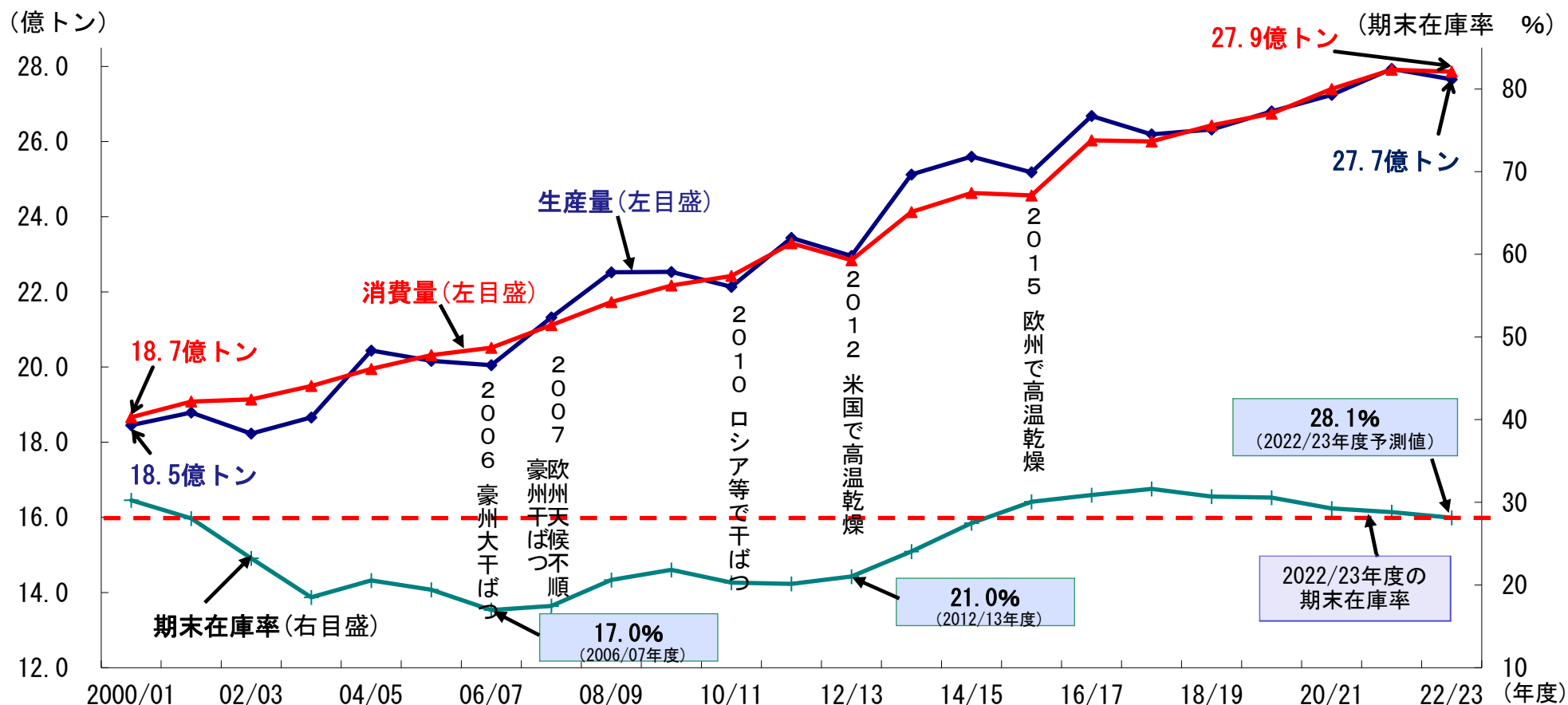
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.1%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

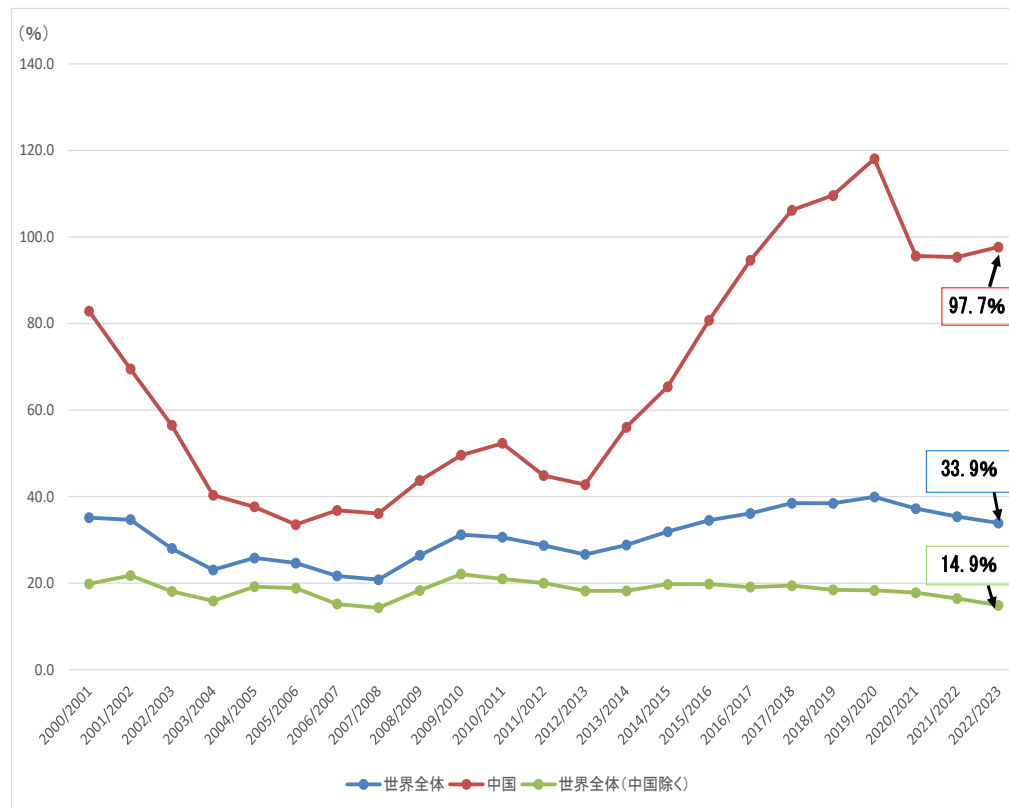


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2022)、「PS&D」

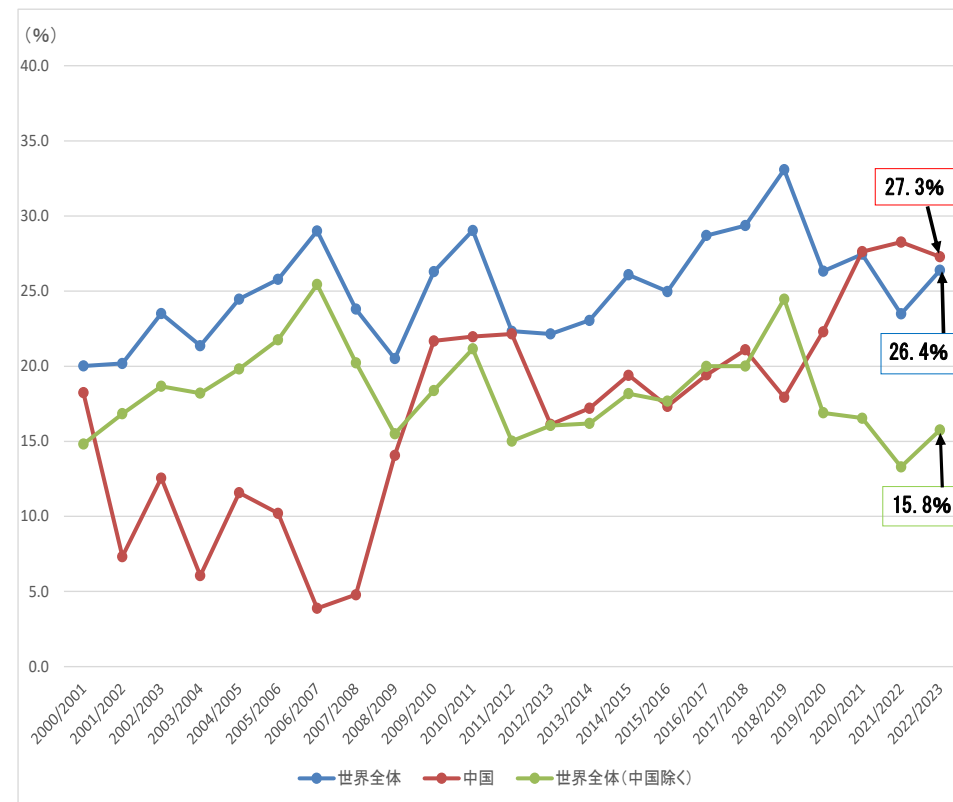
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

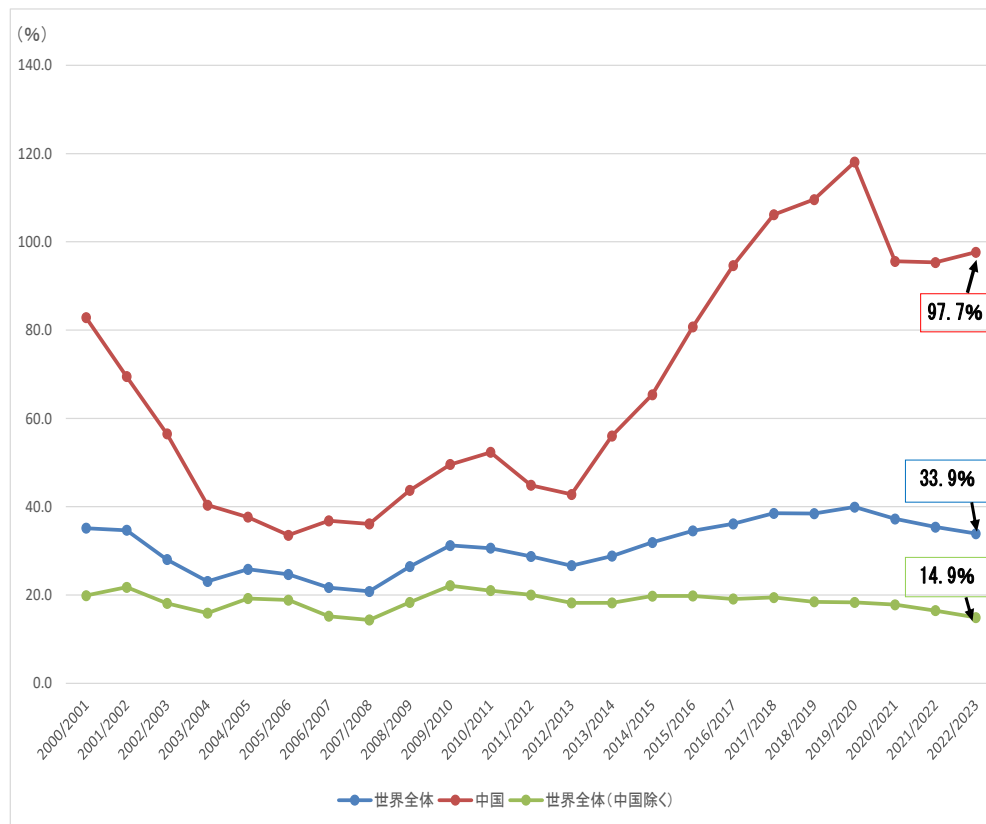
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

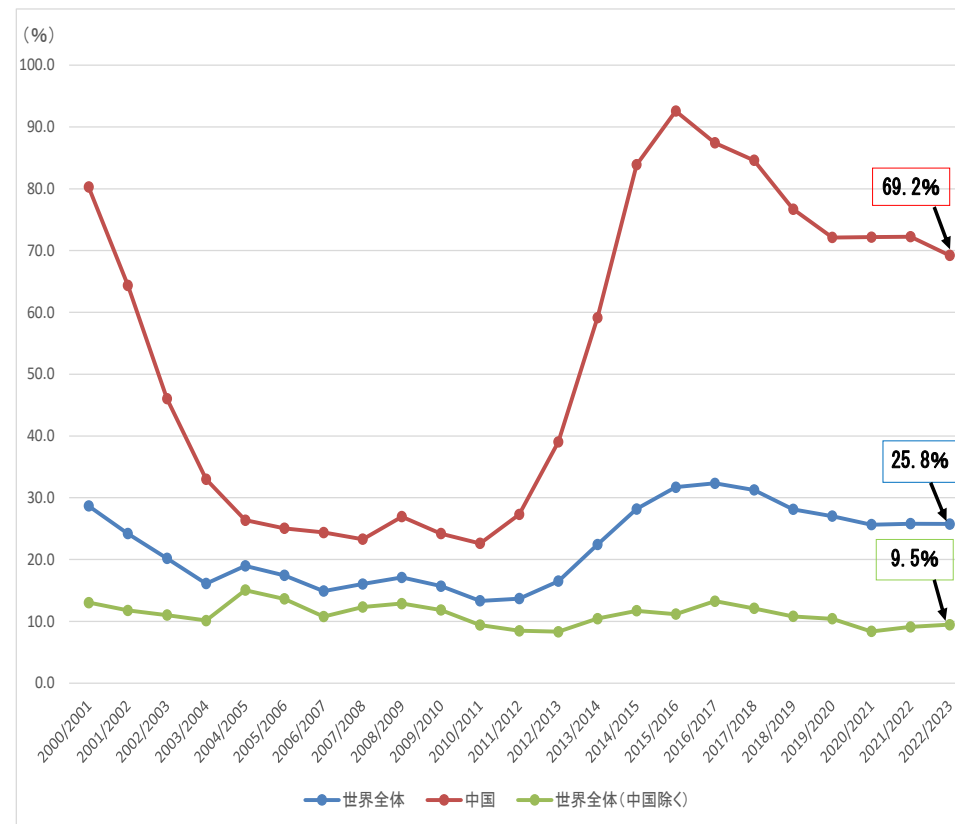
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

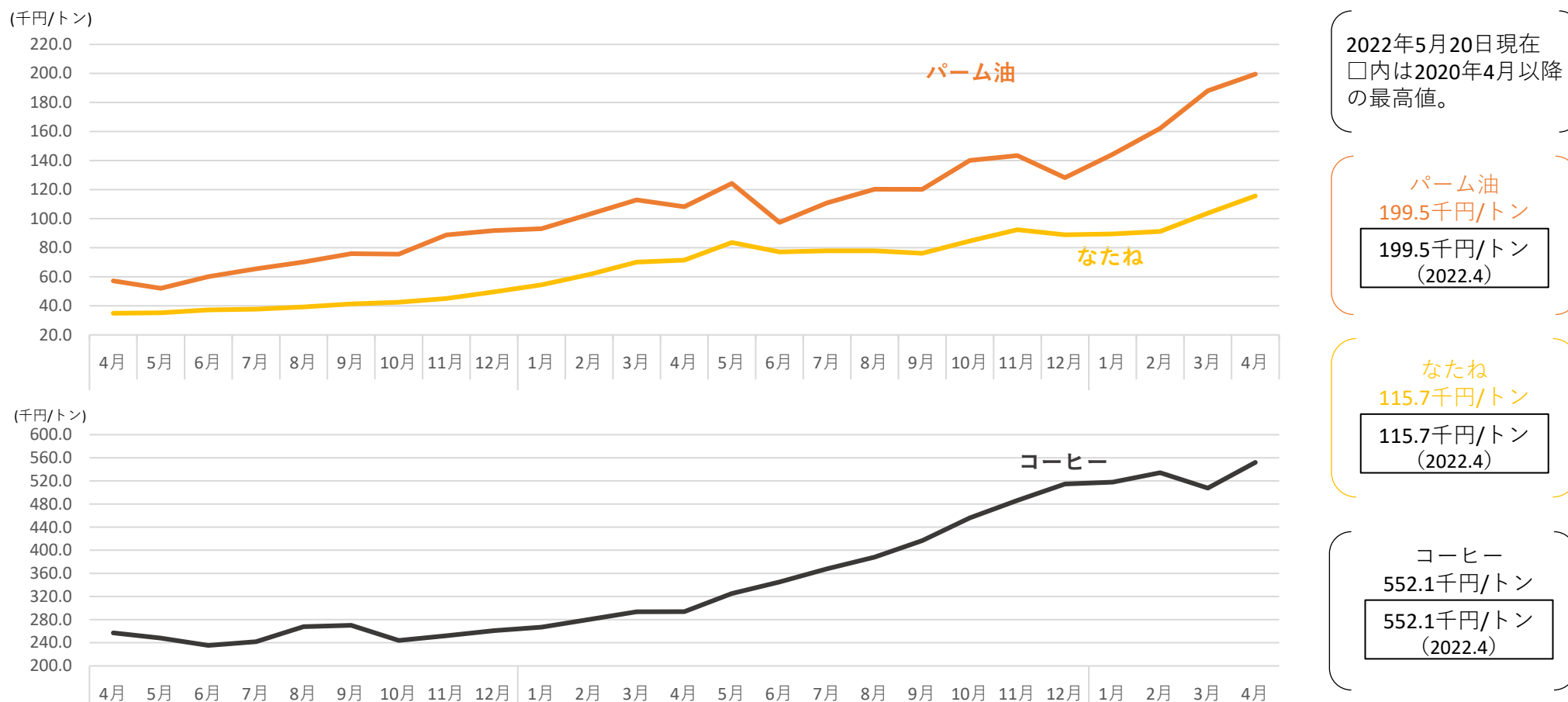
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

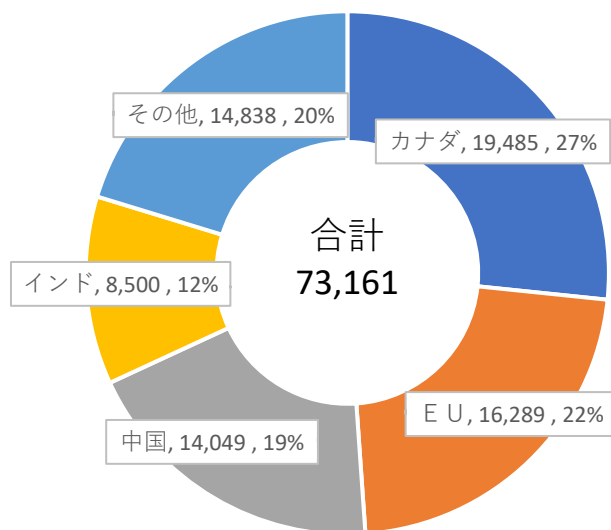


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

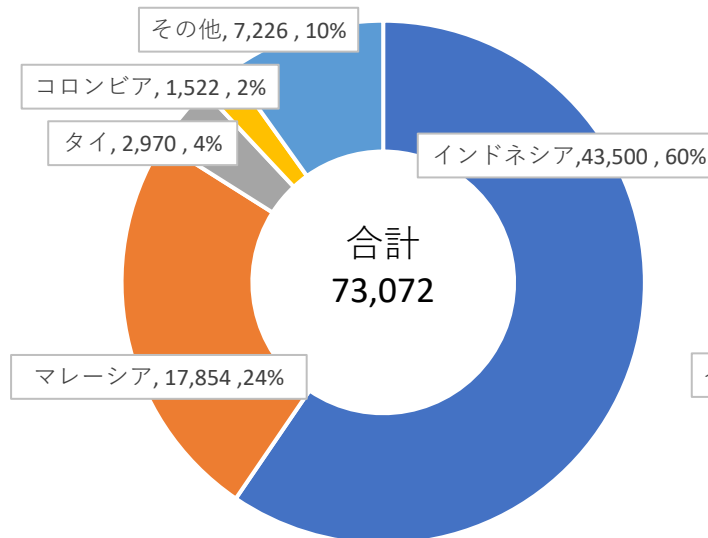
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



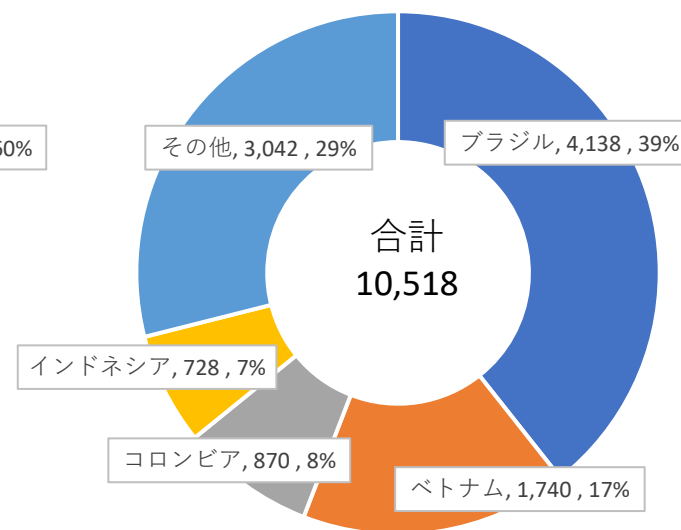
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年4月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.1～134.8(前年同月比で－1.0%～36.5%) の範囲内。

消費者物価指数(総務省) (令和3年11月～令和4年4月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3		R4				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	99.7	100.0	103.2	107.1	107.2	108.0	8.9%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	101.0	98.5	100.4	100.9	100.9	100.1	－1.0%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.6	102.5	102.3	102.1	102.9	103.1	2.1%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	120.5	121.6	124.6	128.4	132.2	134.8	36.5%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.6	97.6	98.3	99.0	99.9	100.7	0.8%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.5	112.0	112.3	113.3	120.3	123.9	24.3%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	95.9	95.3	98.5	100.2	99.3	103.0	2.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.8	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	－0.8%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.0	100.9	101.2	101.5	101.9	102.4	2.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省) (令和3年11月～令和4年5月)

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3		R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	104.6	105.1	104.6	－0.5%	6.7%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	97.8	98.4	98.4	99.0	99.0	99.0	0.0%	－0.6%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.1	100.7	101.6	101.1	102.0	101.6	102.4	0.8%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	115.3	116.3	119.1	122.9	126.4	129.6	130.8	0.9%	33.2%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.8	97.5	97.7	98.1	98.4	99.0	99.6	0.6%	0.2%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	106.6	105.6	105.9	105.9	112.1	117.2	117.2	0.0%	20.0%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	93.6	92.1	98.6	98.6	98.6	105.0	104.5	－0.5%	6.0%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	0.0%	－0.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年6月号（5月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）2月の牛肉輸出量、日本、韓国向けは減少も中国向けが増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002183.html

（EU）牛飼養頭数の減少から22年の牛肉生産量は減少見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002190.html

（豪州）牛肉輸出量、近年にない低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002191.html

（ブラジル）2021年の牛肉輸出量、7年ぶりに前年を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002192.html

◆豚肉

（米国）飼養頭数の減少は今後も続く見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002193.html

（カナダ）食肉処理場の稼働率の低下により飼養頭数増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002194.html

（中国）豚飼養頭数減少も、生体豚価格はいまだ低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002195.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格、過去最高値を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002196.html

（豪州）生乳生産量、9カ月連続で前年同月比減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002197.html

（NZ）2021/22年度の生乳生産量、前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002199.html

◆飼料穀物

（世界）ブラジルなどの上方修正で、世界のトウモロコシ生産量は引き続き過去最高の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002200.html

（世界）南米での大豆減産見通しで、輸出と期末在庫は4カ月連続の下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002225.html

（米国）トウモロコシ期末在庫率、引き続き9%台に据え置き

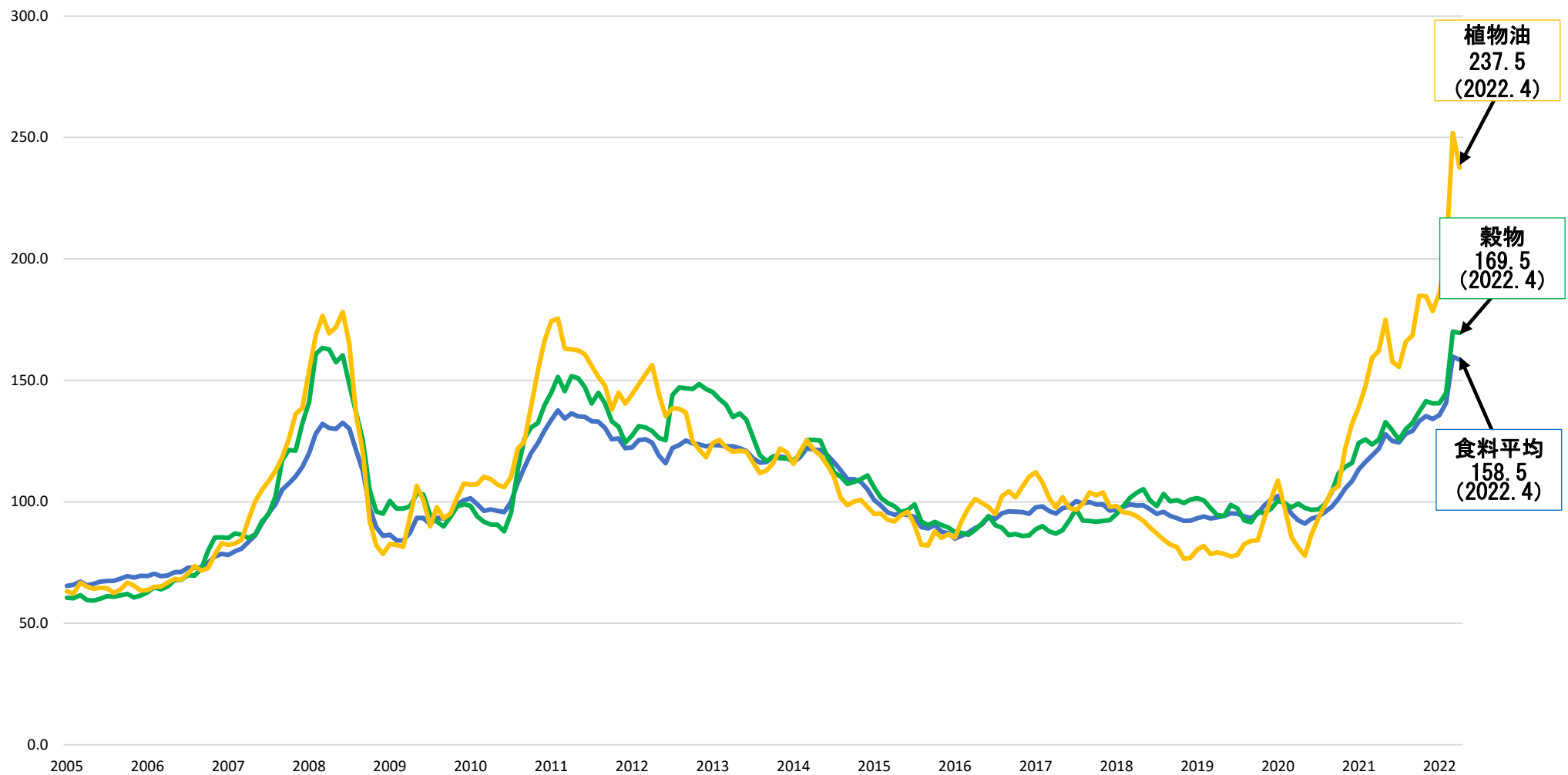
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002201.html

（中国）2021/22年度のトウモロコシ、大豆の需給見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002202.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.5)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

— 食料平均 — 穀物 — 植物油